

自主製作映画、監督の弟主演



イベントで作品を解説する押田監督(左)と清剛さん(8日、川崎市)

ダウン症の男性 たくましさ描く

故今村昌平監督の作品などに関わってきた映画プロデューサーが、ダウン症の弟を主演に撮った自主製作映画「39(サンキュー) 窃盗団」が話題を呼んでいる。ダウン症と発達障害の兄弟が窃盗団を結成するという異色のコメディ。知的障害者を取り巻く厳しい現実を直視しながら、兄弟が助け合い、たくましく生きる姿を描いている。

脱線窃盗団、ユーモラスに

物語はダウン症のキョタカ、弟で発達障害のヒロシの2人を軸に描かれる。ヒロシは振り込め詐欺のリーダーから「おまえの兄貴は(心神喪失者の行為は罰しないという)刑法39条があるから刑務所に入らなくていいんだぞ」とたまされ、「39窃盗団」を結成する。しかし、キョタカが盗んでくるのはカエルのおもちゃや土佐犬の置物など、とんちんかんなものばかり。2人は住むところをなくし、所持金も尽きてホームレスに。たまされ、殴られ、ごみ箱をあさりながらも懸命に生きる姿を映し出す。

押田興将監督(43)は今村監督の「カンゾー先生」で助監督を務め、近年は映画プロデューサーとして活躍してきた。約20年前からダウン症の弟、清剛さん(35)を撮りたいと思い続け、清剛

さんがキョタカ役を主演する自主製作作品として実現した。ほとんどのスタッフはボランティアで参加。発達障害のヒロシを演じるのも押田監督の弟、大さん(37)だ。フィクションだが、コラが大好きだったり、チャンネル争いで頑として譲らなかつたりといったキョタカのキャラクターは清剛さんの素顔のまま。

撮影現場でも清剛さんの自由な振る舞いを生かした。空き巣に入ったシーンでは、盗みそっちのけで台所にあつたせんべいをポリポリかじり出すなど予想外の行動が、作品にユーモラスな味を与えている。路上生活を余儀なくされ、刑務所を出入り…。登場する知的障害者は過酷な境遇にあるが、明る

さを失わない。押田監督は「将来に明るい展望を見いだしていく時代だからこそ、ささやかなことに幸せを感じられる弟のたくましさを感じたかった」と話す。21日まで川崎市アートセンターで上映(16、17日は休映)。15日に京都府城陽市で上映会が予定されているほか、大阪府でも年明けに公開される見込み。